[時 評]

理　事●中島　公博

平成30年9月6日，北海道大停電―電気って本当に有り難い―

最近の日本は異常気象が続いています。平成30年9月5日，関西を中心に猛威を振るった台風21号は北海道の北で温帯低気圧になりましたが，札幌でもものすごい風で自宅は停電になりました。風呂も入れず食事もできないので，停電を免れた，バブルの頃にできた近くの高級ホテルに行って久しぶりに温泉につかり帰宅。程なく20時30分には電気が灯り，やれやれといったところで床に就きました。ところが・・・

翌日の9月6日（木）午前3時7分，たまに早朝覚醒する私はそのときもすでに目は醒めていたのですが，突然のものすごい揺れを感じました。北海道胆振東部地震です。病院の所在する札幌市北区では震度5強，隣の東区は震度6弱の揺れでした。そして，その後の北海道全域295万世帯にわたる大停電です。スマホのニュースで「道内全域？」と聞いて，フェイクかと思った程です。これが日本で史上初めての「ブラックアウト」です。

物理には疎いですが，電気は周波数が乱れると，発電所のタービンの回転数もおかしくなり，発電所自体が壊れるおそれがあるそうです。発電所は，周波数を一定に保つために電力の需要と供給を同じ量にする必要があります。今回の地震直後，苫東厚真火力発電所の3基のうち2基が緊急停止。供給の4割余りにあたる130万キロワットが落ち，さらに午前3時25分には残る1基とともに別の発電所も停止して，前代未聞の北海道全域が停電するはめになってしまったのです。

病院ではいち早く職員が駆けつけました。朝の診療前に対策本部を立ち上げ，職員に集合してもらい，今後の対応についての情報周知を行い，外来は必要最小限にして，電子カルテはモバイルパソコンで診察，処方箋は医事コンが使えないことから手書き発行しました。信号も停電し，JR，地下鉄，バスなど公共交通機関がすべてストップしているなか，停電1日目は外来30名，入院1名。2日目9月7日（金）は外来80名，入院は措置入院1名含めて2名でした。午後から地下鉄が運行を開始しましたが，午前中には電気が復旧するのではないかとの期待も虚しく，停電が解消したのは午後8時30分。じりじりと不安が募るなかで「止まない雨はない。電気のつかない停電はない」と職員を慰め，奮起を促し対策を練った次第です。

今回の震災では，日本精神科病院協会・山崎会長の指示のもと災害対策本部が真っ先に立ち上がり，何かあれば災害対策本部に連絡すればいいという安心感がありました。いつまで停電が続くのかわからないなかで，札幌市内では断水になるとのデマ情報も流れ，食料，水やガソリンの確保のため，コンビニやスーパー，ガソリンスタンドが長蛇の列となりました。結果的には，当院は丸2日間の停電でしたが，季節的に暑すぎず寒すぎずの気温で助かりました。これが夏の30度を超えるような時期や，マイナス10数度まで下がる冬場だったらと思うと空恐ろしくなります。

震災後2～3週間経ってから疲労感や不眠，不安感を訴える患者さんもいましたが，被害が少なかった方のなかには，震災や停電でかえって気が張って何とかしなきゃと元気になったうつの患者さんや，家族とのつながりや人の結びつきのありがたさを感じた不安障害の女性，道内すべての電気がついていない真っ暗闇のなかで，星がきれいに見えて感動したという強迫性障害の患者さんもいました。

今回の震災と大停電を経験して，普段からの準備が必要だと心底感じました。それにしても，われわれは電気なしでは生きていけません。電気って本当に有り難いものです。

日本全国には今なお，避難所暮らしの方が数多くいらっしゃいます。お見舞い申し上げるとともに，被災地すべての一刻も早い復旧を祈ります。